

第2章 各教科等における学習評価

1.3 特別の教科 道徳（道徳科）

（1）道徳科における評価のとりえ

児童生徒の人格そのものに働きかけ、道徳性を養うことを目標とする道徳科の評価としては、他の教科、領域のように、観点別学習状況の評価の観点（「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」）の3観点に整理して示した「観点別評価」は妥当ではない。そのため、授業において児童生徒に考えさせることを明確にして、「道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己の（人間としての）生き方についての考えを深める」という学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を、一定のまとまりの中で、児童生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を適切に設定しつつ、学習活動全体を通して見取ることになる。

平成20年小学校（中学校）学習指導要領解説 道徳編

（第3章 第3 指導計画の作成と内容の取扱い4）

児童（生徒）の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする。

平成27年小学校（中学校）学習指導要領解説 特別の教科 道徳編

（第3章 第3 指導計画の作成と内容の取扱い4）

児童（生徒）の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

平成29年3月31日に小学校（中学校）学習指導要領の全面改訂が行われたが、既に平成27年3月27日に告示された「第1章 総則」のうち道徳教育に関する部分や「第3章 特別の教科 道徳」については、この全面改訂後も一部の項目の場所が移動された等の形式的な変更点以外は、実質的な変更はない。

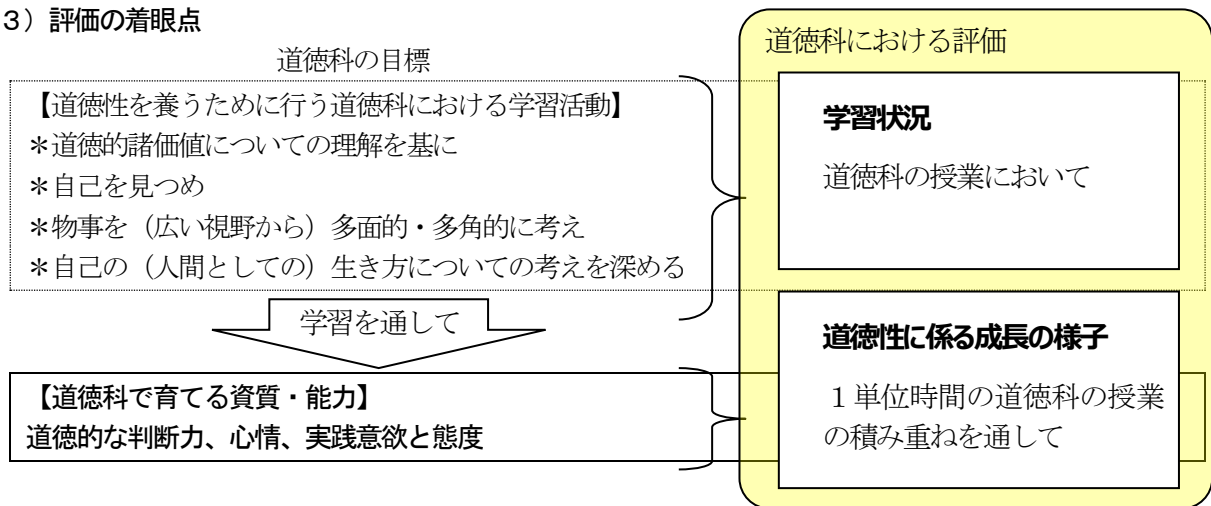
昭和33年告示の学習指導要領から示されているように、授業の中で評価は行われてきた。しかしながら、指導要録に固定の記録欄が設定されていないこともあり、必ずしも十分な評価活動が行われておらず、このことが、道徳教育を軽視する一因となったとの指摘もある。このような実態の改善を図る観点から、「道徳教育全体の充実を図るためには、これまでの反省に立ち、評価についても改善を図る必要がある。」（中央教育審議会答申 平成26年10月）と示された。

こうしたことを踏まえて、より一層、実効性のある評価へと転換していくことが重要となっている。

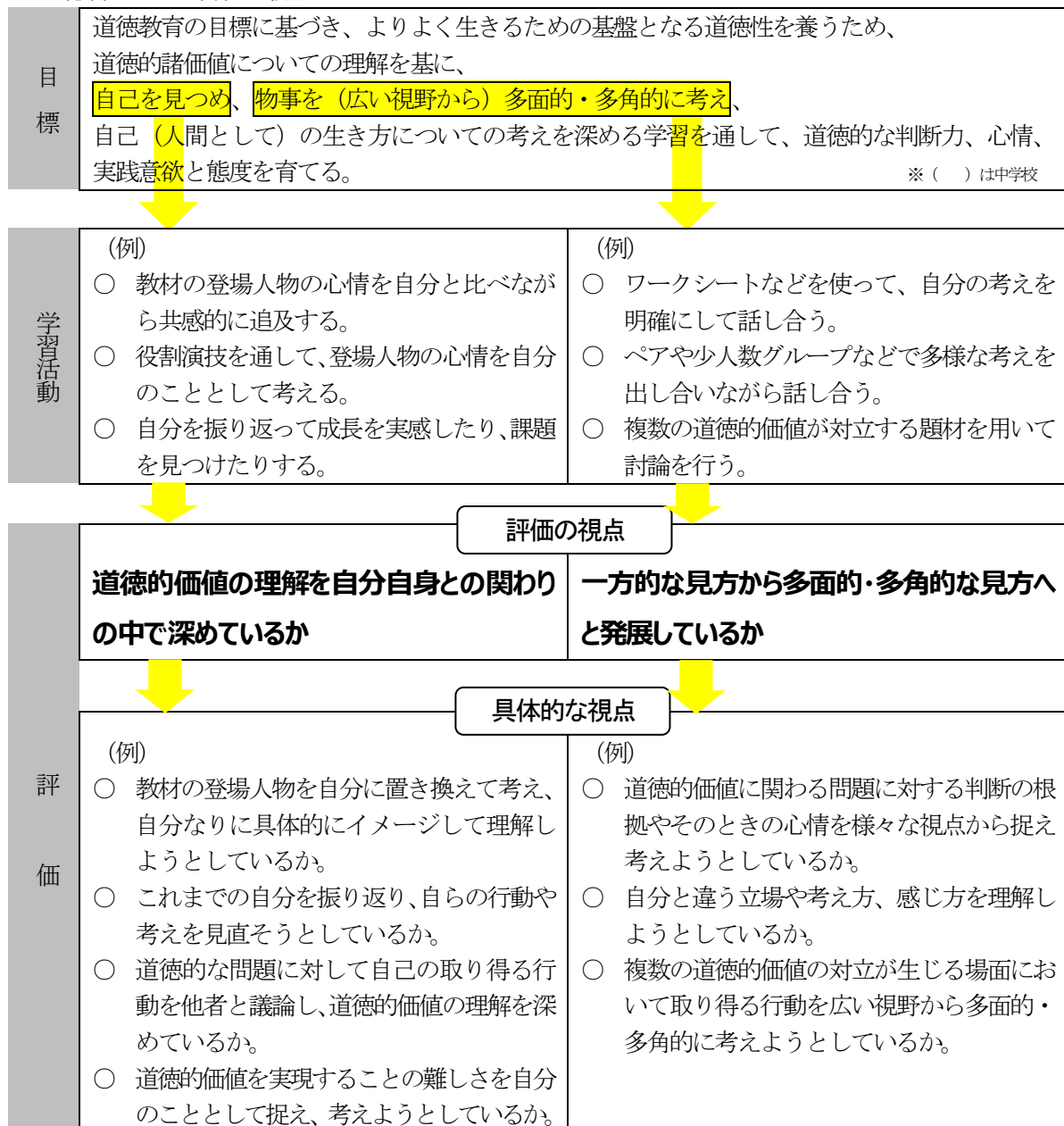
（2）道徳科における評価の基本的な考え方

- 児童生徒の側から見れば、自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくものであり、教師の側から見れば、教師が目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料である。
- 道徳科の特質を踏まえれば、評価に当たって、次の内容が求められる。
 - ① 数値による評価ではなく、記述式とすること。
 - ② 個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること。
 - ③ 他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価（※）として行うこと。
 - ④ 学習活動において、児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること。
 - ⑤ 道徳科の学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を一定のまとまりの中で見取ること。
※個人内評価…児童生徒のよい点を褒めたり、さらなる改善が望まれる点を指摘したりするなど、児童生徒の発達の段階に応じ励ましていく評価

(3) 評価の着眼点



(4) 道徳科における評価の視点



(5) 道徳科における評価の方法

① 基本的な考え方

■個人内評価として記述式で行う

道徳科において養うべき道徳性は、児童生徒の人格全体に関わるものであり、数値などによって不用意に評価してはならない。よって、ほかの児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行う。

■一定のまとまりの中で評価する

感想をそのまま書いただけであった児童生徒が、学習を重ねていく中で、教材の登場人物の心情を自分に置き換えて考えたり、話し合いによって深まった考えを書くようになってきたりするなど、1単位時間の授業だけでなく、年間や学期といった一定のまとまりの中で、児童生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に見取る。

② 具体的な工夫

■ノート、ワークシート、感想文等のファイル

児童生徒の学習の過程や成果などの記録を取りためておいたものを見直すことで、一定期間での成長や変容を見取ることができ、評価に活用することができる。

■エピソード

児童生徒の発言や活動の様子などのエピソードを記録し、累積したものを評価に活用することができる。

■観察

発言や記述が苦手な児童生徒の様子を観察したり、意図的に指名したりして、評価できる根拠を集めることで、評価に活用することができる。

《評価する上での留意点》

➤ 個々の内容項目ごとに評価しない

個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とし、年間や学期といった一定のまとまりの中で、道徳科の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取る。

➤ 学校として組織的、計画的に評価する

道徳科の評価の在り方や評価の方法などを、学校や学年で共有し、評価結果についても教師間で検討するなど、組織的、計画的に評価する。

<参考資料>

『『特別の教科 道徳』の指導方法・評価等について（報告）』

（平成28年7月22日 道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議）